令和元年
夏

木曽三川　歴史・文化の調査研究資料

KISSO

2019
Vol.
111

関市

花崗岩の断崖が連なる
板取川の秘境　川浦渓谷

地域の歴史
関市東部を流れる津保川の流域と日本平成村　1

地域の治水・利水
平成三十年七月豪雨の津保川氾濫　3

歴史記録
地域と河川　第五編
養老町高畑に残る牧田川の将棋頭　5

研究資料
尾張平野南部における川の恵みとその変容
蟹江町歴史民俗資料館　主任学芸員　大野麻子　8

関市東部を流れる津保川の流域と日本平成村

新元号のスタートとともに脚光を浴びることになった旧武儀町では、町おこしの一環として、観光協会を推進母体とした「日本平成村」を企画し、村長に女優の三田佳子さんを迎えて、平成三（一九九一）年一月八日に立村を宣言しました。

平成六（一九九四）年には、県道五十八号「関・金山線」（通称：平成こぶし街道）沿いの津保川のほとりに、日本平成村のコミュニティーの核となる日本平成村花街道センター（「道の駅平成」の前身）が開業しました。

現在「道の駅平成」では、地元特産の原木しいたけや椎茸すなっくをはじめ、近隣の市町と連携してそれぞれの特産品や土産物を販売するとともに、観光協会による観光名所や文化・イベントの紹介など、地域の情報を発信しています。

架け橋渡り初め式

V字形の市域の岐阜県関市

岐阜県のほぼ中央に位置する関市は、平成十七（二〇〇五）年二月に武芸川町・洞戸村・板取村・武儀町・上之保村を編入し、その市域は翼を立てて飛ぶコウモリのような V字形になりました。行政域としては一見奇異な印象を持ちますが、これは旧関市域を流れる長良川に東西から支流が流入している地形に起因します。

V字の根元にあたる南部は旧関市で、古来より飛騨街道や木曽西古道、尾張から郡上への街道などが交差する交通の要衝で、江戸時代には濃州関所が置かれました。現在は、東海北陸自動車道と東海環状自動車道の結束点となり、物流拠点として大きく発展する期待が寄せられています。

また、商工業が発達した地域でもあり、南北朝時代から刀鍛冶が定着して刀剣などを生産し、江戸時代以降は家庭用の打刃物類が主力となっていきました。現在ではイギリスのシェフィールド、ドイツのゾーリンゲンとともに「世界3大刃物産地」と呼ばれ、関の刃物は世界的なブランドとして認められています。

左の翼にあたる地域のうち、北部は長良川の支流・板取川の流域で、旧板取村・洞戸村地区です。板取川に沿って集落が点在する山村で、耕地は少なく江戸時代には美濃和紙が主要な産業で、年貢として紙舟役が課されていた地域です。現在は、清流と豊かな森林を資源として観光開発が進められています。最近では、板取地区の根道神社境内の池が、透明度が高くスイレンとともに鯉が泳ぐ光景がモネの代表作「睡蓮」に似ているとして、SNSで話題になりました。南部は長良川の支流武儀川が貫流する旧武芸川町で、山林の多い農山村地域でしたが、近年は製造業が盛んで物流拠点としても発展しています。

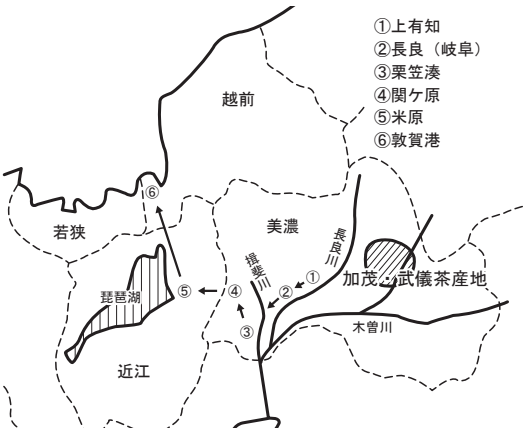
モネの池　〈提供：関市観光協会〉

関市

津保川の木材流送と津保茶

V字形の右の翼にあたる地域は、長良川の支流津保川流域の旧上之保村・武儀町地区で、旧来津保谷と呼称されてきた地区です。『新撰美濃志』に「上之保・中之保・下之保三郷をすべて津保谷という」と記され、保は原野を開拓した私田の意味があり、鎌倉時代成立の荘園などより後に開発された地域であることが伺われます。地域の大部分が山林で、集落・耕地は津保川とその支流の河岸や河岸段丘面に点在しています。

耕地が少ない津保谷では、林業に従事する人が多く、江戸時代には津保川の木材流送が行われた記録が残っています。文政十一（一八二八）年の「津保川筋木材川下覚



茶の道 ー美濃から敦賀港へー ＜出典：『七宗町史』＞

書」によると、津保川筋の木材は、御用材や作事用材として売買されていたようで、流送先は芥見（岐阜市芥見）などでした。上之保村名倉には川奉行が置かれ、流木には奉行の検印がなされましたが、上之保村分は「上つ」、下之保村分は「下つ」としたそうです。

津保川の木材流送は、大正期まで行われていたそうです。太平洋戦争中の乱伐によって山林は荒廃しましたが、戦後、森林組合を中心に造林事業が推進されました。人工林はほとんどスギ・ヒノキで、なかでもヒノキは「津保谷のひの木」として高く評価され、地元でも製材工場を持つ建設業や建具製造業が多く営まれていました。

このほか、津保谷の特産品としては「津保茶」があり、『濃州徇行記』には、「茶を多く製して越後・出羽・陸奥の国あたりへつかわす」とあります。津保谷の茶は、はじめは「下之茶」（飛騨から見て南の地域の茶）の一部として、飛騨商人によって北陸・東北各地に販売されていました。

しかし、飛騨経由では険しい山道を陸送するため、運賃が高くなり、後には美濃商人によって敦賀港から海上輸送が行われるようになりました。その運送経路は、おおむね津保街道を下って上有知湊へ陸送し、湊から長良川を舟で下して揖斐川の烏江湊・栗笠湊で陸揚げし、越前街道か近江街道経由で敦賀港に運びました。美濃商人は「津保茶」と称して販売を行ったので、津保茶は全国的に名高い銘柄となりました。

明治期にも津保茶の生産は盛んで、換金商品として栽培加工が増えていきましたが、明治中頃から静岡茶におされたため、茶畑は少なくなっていきました。

日本平成村と令和への架け橋

平成元（一九八九）年一月十日、昭和に代わる新元号「平成」が発表されました。平成は、中国の古典「史記」の五帝本紀にある「内平かに外成る」と、「書経」の大禹謨の「地平に天成る」を出典として、「天地、内外ともに平和が達成される」を意味します。

日本平成村立村式 ＜出典：武儀 50 年のあゆみ＞

発表と同時に、元号と同一表記の地名「平成（へなり）」が町内に所在する旧武儀町は騒然となりました。この奇遇は全国でただ一箇所ということで、新聞・テレビ・ラジオなど報道関係や雑誌社が取材に訪れ、当時の町役場、平成地区は対応に大わらわとなりました。多くの観光客も訪れ、多い日には一，〇〇〇台の車が列をつくり、「平成」と書かれたグッズが飛ぶように売れました。

平成地区は、道の駅から平成こぶし街道を一・七kmほど北上し左に折れた先にあり、山あいに水田が開けたのどかな田園地帯です。ここから、平成自然公園へ抜ける道に平成川を渡る橋があり、昭和から平成への架け橋「元号橋」として整備されています。

平成の地名の由来は定かでありませんが、文禄三（一五九四）年に豊臣秀吉が行った山林検地で、「へなり山」など下之保の山年貢を十八石に定めるという文書が残っており、ついで享和元（一八〇一）年に起こった村内の争いの調停書に平成の地名が見られます。

平成二十九年（二〇一七）十二月、天皇陛下が平成三十一（二〇一九）年四月三十日に退位し、皇太子殿下が翌五月一日に即位されることが発表されました。これに伴う新しい元号の公表について、当初は国民生活に支障が無いよう半年程前には発表されると想定されていましたが、最終的に一ヶ月前に公表することに決まりました。

平成三十一（二〇一九）年四月一日、新しい元号は「令和」と発表され、出典は「万葉集」の梅花の歌、三十二首の序文、「初春の令月にして、気淑く風和らぎ、梅は鏡前の粉を披き、蘭は珮後の香を薫らす」から引用したと説明されました。元号の漢字は、これまで中国古典（漢籍）を出典としており、日本の古典から採用したのは確認できる限り初めてのことでした。

日本平成村では、「ありがとう！平成時代」として、三月二十一日と四月三十日に道の駅などで「平成まつり」を開催しました。平成最後の日となった四月三十日には、道の駅の裏「しあわせの気の森」に、改元を記念して作られた「しあわせの架け橋」の渡り初め式が催され、三田佳子村長によるテープカットの後、渡り初めが執り行われました。当日は平成最後の日の記念にと多くの人が訪れ、県道五十八号には道の駅を先頭に八kmに及ぶ渋滞が発生しました。

元号橋

■参考文献
『上之保村史誌』　平成十二年　上之保村
『武儀町史』　平成四年　武儀町
『武儀　50年のあゆみ』　平成十七年　武儀町

平成三十年七月豪雨の津保川氾濫

平成三十（二〇一八）年七月豪雨では、岐阜県でも県内全三十二の観測地点のうち十六地点において七十二時間雨量が観測史上一位を記録し、県内初となる大雨特別警報が十六市町村に発表されるなど、記録的な豪雨となりました。

特に長良川では、降り続く長雨により九・一二豪雨災害（昭和五十一（一九七六）年九月）に匹敵する水位となり、平成三十（二〇一八）年七月八日の午前三時頃には、岐阜市の基準観測所（忠節地点）において最高水位に達していました。

平成三十年七月豪雨時の津保川　＜提供：和座宏之 氏（関市下之保）＞

平成三十年七月豪雨災害の概要

平成三十（二〇一八）年六月二八日から七月八日にかけて、西日本付近に停滞した梅雨前線に向けて極めて多量の水蒸気が流入し「線状降水帯」が発生した結果、記録的な大雨となり、中・四国を中心に全国各地で甚大な被害が発生しました。

気象庁はこの豪雨の名称を「平成三十年七月豪雨」と定めました。この期間の総雨量は、四国地方で一，八〇〇㎜、東海地方でも一，二〇〇㎜を超えるところがありました。特に被害が甚大だったのは、広島、岡山、愛媛の三県で、広島県で人的被害が最も多く、これは土石流などの土砂災害が住宅地を含む多くの箇所で発生したためです。

また岡山県では、洪水による広範囲での浸水被害が発生し、特に大きな被害を受けた倉敷市真備町では、町内を流れる高梁川支流の小田川が破堤し、洪水氾濫によって一面が水に浸かり、五十四名の方が亡くなるなど大きな被害が発生しました。

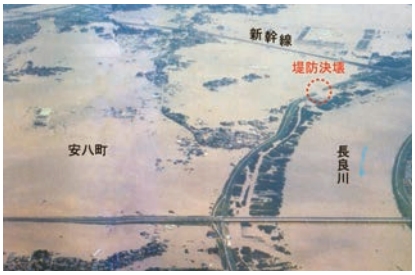
平成三十年七月豪雨の被害（全国）

死者・行方不明者	345人
負傷者	433人
家屋全壊・半壊	18,010棟
浸水家屋	28,469棟

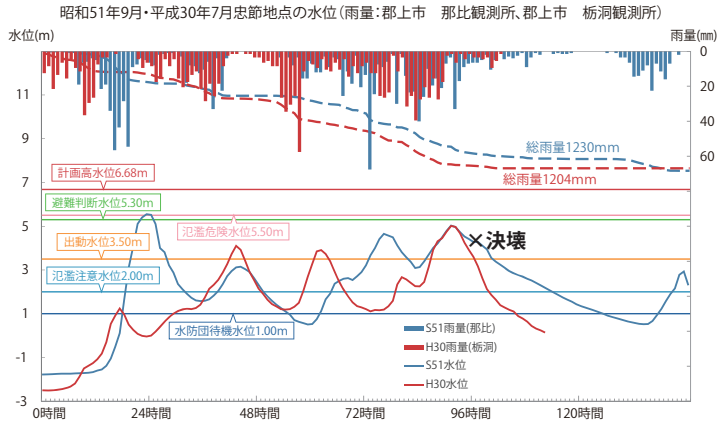
小田川の氾濫被害地（倉敷市真備町）

九・一二豪雨災害

平成三十年七月豪雨での長良川の出水は、水位の高い状態が長時間継続し、その間に複数回のピークを迎えた点で、九・一二豪雨災害（昭和五十一（一九七六）年九月）に状況が酷似していました。当時の台風第十七号がもたらした豪雨は、岐阜・西濃地方で河川の氾濫、土砂崩れ、道路の寸断など大きな被害をもたらし、岐阜県史上最悪の水害となりました。特に被害が大きかったのは、安八町大森で長良川右岸堤防が決壊し、狂ったように濁流が流れ出し、見る見るうちに同町と隣の墨俣町を飲みこんでいきました。



長良川決壊現場（安八町大森地区）



昭和五十一年九月・平成三十年七月忠節地点の水位

平成三十年七月豪雨において、流域内の最大総雨量・流域平均雨量は九・一二豪雨災害と同程度でしたが、これまでの堤防強化・浚渫などによる治水安全度の向上によって氾濫を免れました。

長良川河口堰により、塩水の遡上を防止することで可能となった大規模な浚渫・掘削の効果が表れ、墨俣地点で約八十㎝の水位が低減したと推定されています。

長良川支流・津保川の洪水氾濫

平成三十年七月豪雨で、長良川流域で最も大きな被害を受けたのは、津保川上流部での洪水氾濫でした。津保川は、岐阜県関市上之保の北端・放生峠の南を発し、関市東部を南流して、いったん加茂郡富加町を流れ、ふたたび関市に入って流路を西に変え、岐阜市東端の芥見で長良川に合流する、全長一二六㎞の河川です。

平成三十年七月八日午前一時十五分、武儀の富之保、下之保で一時間に約一〇〇㎜の記録的短時間大雨情報が出され、午前一時過ぎ頃から津保川の水位が急上昇し、上之保・武儀で氾濫し、多くの家屋や倉庫、店舗、事業所などで床上浸水などの被害が発生したほか、車や家財道具などが水没する被害も発生しました。被害家屋は、全壊十一棟、半壊二二九棟、床上・床下浸水一九六棟にのぼり、上之保では軽自動車が用水路に落下し一名が亡くなられています。また、道路や河川、橋梁、上下水道施設、公共施設や、農地・農業施設なども被災し、市民生活に大きく影響を及ぼす事態となりました。

津保川の被害状況（武儀地区）＜提供：関市役所＞

今も残る浸水跡（上之保地区）

津保川は流域が南北に長く、東西両側の急峻な山地斜面に降った雨が谷底の津保川に集中する特徴があります。また津保川には、両岸に山がせまった狭窄部が見て取れ、洪水が流れ下る際にこのような狭窄部に阻まれ、その上流の水位が上昇していたと考えられます。こうした地形の特性に加え、数日にわたって降り続いた雨により山の保水力が飽和して、降雨が短時間に流出し、河川の流下能力を超える量の雨水が川沿いの低い土地まで冠水しながら流れていたと考えられます。

過去の津保川洪水氾濫

西日本を中心に甚大な被害が連日報道されるなかで、過去におこった災害は、地域の特性を知らしめる重要な教訓と指摘されました。しかし、近年は住民の移り変わりや治水安全度の向上などで、こうした過去の経験が忘れさられたり、軽視される傾向にあります。後世への戒めとして建立された明治期の災害碑の存在を、住民の多くが知らなかった事例も紹介されていました。

津保川については、洪水氾濫は枚挙に暇がないほど、頻繁に発生しています。江戸時代の水害は、被害の調査帳面や、災害による難渋のため年貢差し延べを願い出た文書によって、出水の状況や被害の規模がわかります。『上之保村誌』の災害略史は、江戸時代以降の災害年表で「慶長十三（一六〇八）年四月十一日、美濃一円、中濃・武儀津保川一帯大雨大洪水」に始まり、「慶応二（一八六六）年八月八日、雷豪雨、津保川・長良川洪水、九月十八日暴風雨、洪水被害出る」までの二五八年間に七十三件の災害が記載され、うち六十五件が洪水氾濫です。

明治期に入ってからも津保川は氾濫を繰り返し、明治二十八（一八九五）年から明治四十三（一九一〇）年は、特に頻発した期間でした。そして昭和五（一九三〇）年には、美濃地方が七・八月に三回の豪雨災害に見舞われました。七月十九日には、津保川が出水し、橋梁三本が壊され各地で田畑冠水など被害を蒙り、二十二～二十四日にも氾濫被害が続出しました。昭和二十九（一九五四）年九月一日の豪雨は、六時間で五〇〇㎜を超え、これまで多くの洪水を経験してきた古老が「こんな大水は今まで見たことも聞いたこともない」という、一〇〇年遡っても未曽有の流量だったと推定されます。河川の決壊、橋梁流失、家屋の浸水などが各地で発生し、死傷者が出る大災害となりました。昭和四十三（一九六八）年の八・一七豪雨では、上之保で浸水家屋一〇〇余戸、橋梁なども流失しました。平成十一（一九九九）年九・十五災害は、台風と秋雨前線の停滞による大雨で、県内各地で大きな被害があり、津保川も氾濫し大きな被害が出ています。

平成十一年九・十五災害（下之保多良木）
＜提供：関市役所＞

津保川氾濫後の防災対策

平成三十年七月豪雨の被災地では、大勢のボランティアが支援に入るなど、復興が進められました。国や地方自治体では、毎年のように発生する豪雨について、平成二十七年より災害対応や市民の避難行動に向けた「水防災意識社会の再構築」を目指し、さまざまな検証や対策がなされました。

氾濫で大きな被害を受けた津保川を管轄する岐阜県は、新たに危機管理型水位計を設置するとともに、河川別のハザードマップを作成しました。

また関市では、平成三十一年度予算で、自治会などでワークショップを開催し、一人ひとりが災害時に適切な避難行動について勉強し、個人ごとの「災害避難カード」を作成する活動や、防災行政無線の戸別受信機購入への補助、あんしんメールの機能向上、高性能河川監視カメラへの変更などに取り組んでいます。

■参考文献
『上之保村史誌』　平成十二年　上之保村
『武儀町史』　平成四年　武儀町
『武儀　50年のあゆみ』　平成十七年　武儀町

地域と河川　第五編

養老町高畑に残る牧田川の将棋頭

輪中堤には、上流部を堤で囲い下流部には堤が無い「尻無堤」があります。また「尻無堤」の頭部が将棋の駒の形状をしている堤もあり、「将棋頭」と呼称されています。

本稿では、揖斐川右支川・牧田川に挟まれた大墳輪中輪頂部（現養老町三神町）の西部で旧高畑村字将基頭の堤防形状が、山梨県の釜無川右支川・御勅使川の流れを二派に別ける堤「将棋頭」と類似であることを示した後、大墳輪中輪頂部の尻無堤、つまり「将基頭」が造られた時期について推察します。なお、以後は字名「将基頭」を「将棋頭」と同じ意味と解釈し、以降は「将棋頭」と表記します。

牧田川の将棋頭の位置
＜出典：『養老町域多芸野地名の歴史』濃飛地名民俗研究 2001＞

一．御勅使川の将棋頭

文化十一（一八一四）年の『甲斐国史』は、将棋頭と信玄堤との関係を「六科村西に圭角の堤を築き　流れを両派にして以て水勢を分つ是を将棋頭と言う　其突流して釜無川に会する所に大石を並べ置き水勢を殺ぐ　釜無川の水と共に順流して南方に趣かしむ　於是暴流頗に止み竜王村の堤を築て村里を復することを得たりと言う」と述べています。

つまり将棋頭は、御勅使川上流部で南東への流れを石積出しで北東に変え、将棋頭で流れを二分して水勢を減じ、釜無川左岸の高岩（赤岩）に激突・合流させ、永禄三（一五六〇）年に構築された信玄堤に沿って流下させる一連の治水施設であったと考えられます。

将棋頭の詳細な建設時期は不明ですが、武田信玄（一五二一～一五七三）が御勅使川沿いに大草・竜岡・白根（六科）の三基の将棋頭を築いた、と伝わっており、竜岡と白根の二基が現存しています。

一方、養老町に「将棋頭」の字名があり、昭和初期までこの地で牧田川は南派川と北派川の二派に分かれていました。つまり、「尻無堤」を指し示すこの特異な語彙が、山梨から遠く離れた牧田川沿いでも使用されていました。

御勅使川右岸側の白根（六科）将棋頭

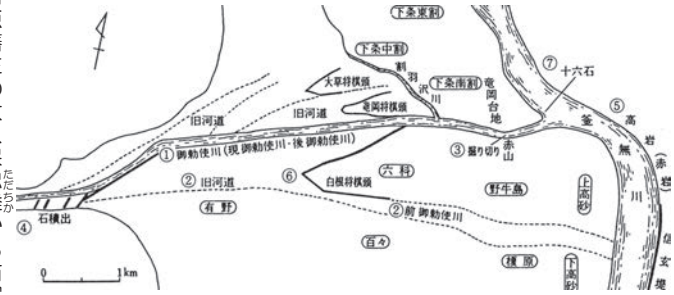
二．大久保長安の治水工事

大久保長安は武将としてではなく、鉱山開発や税務などの任務に当たりましたが、天正十（一五八二）年の武田家滅亡後、武田流の治水技術を引き継いだ人物としても知られています。なお、徳川家康に仕えた長安は、初代小田原藩主の大久保忠隣から苗字を与えられて「大久保」を名乗りました。

長安は、御勅使川を釜無川に直角に合流させて両川の流勢を減じた武田流の治水工事と同じように、八王子の多摩川支川・南浅川の流路を北浅川にほぼ直角にぶつかるように瀬替え工事を行い、遊水地を伴った霞堤の形式で、南浅川右岸側の千人町から本郷村に至る約一・六km余りの土手（「石見堤」、「石見土手」）を築きました。

文政六（一八二三）年の『武蔵名勝図会』によると、「天正十八（一五九〇）年に武州八王子に陣屋を置いた大久保石見守長安が長さ一・五～一・六km、敷九m、高さ二・三mもの大きな堤を築いた」と述べています。

なお長安は、慶長六（一六〇一）年に美濃国代官となり岐阜靭屋町に陣屋を置き、慶長十八（一六一三）年に死去しています。



御勅使川と釜無川の治水施設　＜出典：『将棋頭遺跡』＞

南・北浅川の流路　＜出典：『大久保長安に迫る』＞

三．牧田川が二派となった原因

（一）永禄九（一五六六）年の洪水

『養老郡志』は、牧田川は本来、日吉村橋爪（養老郡養老町橋爪）四番堤と高畑将棋頭の五日市堤は連続していましたが、永禄九（一五六六）年九月の大洪水の際、この箇所が決壊し、新たに北派川ができ、約一㎞下流の直江字中瀬で再び合流した、と述べています。しかし、この洪水が牧田川の分派を決定づけたのではありません。

（二）天正十四（一五八六）年の洪水

古牧田川は、上石津町牧田から養老山地麓の養老町桜井、同勢至、同小倉から南濃町津屋へと流れて、津屋川に結ばれていたようです。

永禄九（一五六六）年の洪水後も、牧田川の本流は津屋川へ流れ込む古牧田川筋でした。

天正十三（一五八五）年の天正地震で揺れ動かされた養老山地は、翌天正十四（一五八六）年の洪水で津屋川へ注ぐ多数の谷川筋に土砂を堆積させ、鉄座で栄えていた勢至への鉄の舟運が不可能となり、牧田川の本流は、高畑から烏江方面への現在の流路に変わりました。

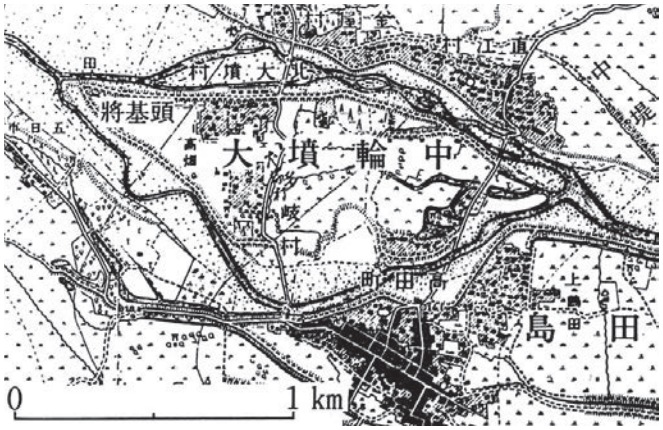
四．徳永寿昌による治水

高須初代藩主徳永寿昌（一五四九～一六一二）は、慶長五（一六〇〇）年に多芸・不破・石津・海西の四郡の内で五〇・六七三石を領し、養老地方では高畑村を含む二十七箇村（一三・二〇〇余石）が徳永領でした。

牧田川筋変遷に関して、元禄六（一六九三）年に江戸検使に宛てた烏江村（現養老町烏江）の口上書は、徳永寿昌が養老山麓沿いに津屋川筋へと流れていた古牧田川を烏江まで掘削した、と述べています。

しかし、この掘削は新河道の掘削ではなく、永禄九（一五六六）年の洪水によって、ある程度の河道が既に烏江に通じており、さらに天正十三（一五八五）年の地震と翌年の洪水によって、養老山麓沿いを流れていた古牧田川の土砂堆積のため、新たに高畑から東流している新牧田川の河道を整備したものと推察されます。その後、寿昌は烏江村から船附村の大野村境までの牧田川の堤防工事を、養老山麓沿いの桜井・上方・竜泉寺・勢至など計十五箇村に命じています。

いつ、寿昌が烏江までの牧田川河道整備や前述の堤防工事を行なったか不明ですが、これら牧田川の河道整備の一端として、寿昌が慶長十四（一六〇九）年頃に将棋頭周辺の堤防整備も行なったと思われます。



大塚（大墳）輪中　＜出典：『輪中』（明治 24 年測図）＞

五．高畑村周辺の堤防

高畑の字「将棋頭」の堤防は、大塚（大墳）村の南北へ大きく広がり、下流部の直江村との境で「霞堤」となっていました。直江村を南北に画す堤防は瓢箪形で、村の最西端から村内の悪水路が堤外地で牧田川に注いでいました。

つまり、養老町高畑の字であった「将棋頭」の下流部には、信玄流の「霞堤」が造られていたのです。

ところで、安藤万寿男は、高畑・大墳両村の築捨堤と直江村の築捨堤とが連続し、一つの大墳輪中が形成された時期について、寛政九（一七九七）年に近い、それ以降の年と考察しています。

高畑村周辺の堤防施設状況を、牧田川が二派に分派してから一〇〇年程経過した、元禄六（一六九三）年の『牧田川南北村水論の裁許図』より概観しておきましょう。なお裁許図は、牧田川の北派川側の橋爪村外二箇村と南派川側の五日市村外十八箇村との川除争論に対する幕府評定所の裁許状（判決文書）であり、図中の番号は将棋頭周辺の堤防に対応しています。

①南宮山の東南端に位置する象鼻山南端部から、橋爪村に折れ曲がりながら伸びている牧田川左岸の堤防（猿尾堤 KSSO Vol.96 参照）は、象鼻山に付いた七十間（一二七ｍ）の下流に一七三間（三一五ｍ）が続き、東側に折れ曲がった（畑所）終端部の長さは三十間（五十五ｍ）であり、全体の長さは二七三間（四九七ｍ）です。

水論では、この猿尾堤が問題となっています。つまり、川南村から提出した内容によると、象鼻山南端部からの猿尾堤は、水論が起こった元禄六（一六九三）年から四十三年前の寅年洪水（慶安三（一六五〇）年九月の「ヤロカの大水」）以後には一四、五間（二十五～二十七ｍ）でしたが、七年前の寅年（貞享三（一六八六）年）までに八十間（一四五ｍ）となり、現在は二七三間（四九七ｍ）に伸びている、と述べています。

②橋爪村を西から東に横切る堤防は、一二〇間（二一八ｍ）と一六〇間（二九一ｍ）の計二八〇間（五〇九ｍ）です。

元禄６（1693）年の『牧田川南北村水論絵図』〈養老町蔵〉

③沢田村からの牧田川南派川沿いの全長七五三間（一・三七〇ｍ）の堤防は、①の堤防の対岸に橋爪村田所として「橋爪村迄一七四間（三一七ｍ）」の堤防、その下流側の同じく橋爪村田所として「是より西橋爪村迄一七〇間（三〇九ｍ）」の堤防が「是より東五日市堤三二〇間（五八二ｍ）」の堤防と接続して東に伸びた後、長一一九間（二一六ｍ）の堤防が五日市村の北側を囲んでいます。

④高畑村西端部から北派川右岸の堤防は、神明神社と現在多芸神社に合祀された八幡神社を含む地の北側が三十間（五十五ｍ）の石積みで、その下流に一三〇間（二三六ｍ）の堤防が大墳村まで伸び、直江村の北岸堤と霞堤を形成しています。

⑤南派川左岸堤は北派川の石積と接続し、七十四間（一三五ｍ）に七十二間（一三一ｍ）の堤防が接続した後に二十九間（五十三ｍ）猿尾が設置され、下流側に伸びた二〇八間（三七八ｍ）の末端から、さらに一三八間（二五一ｍ）の堤が接続して大塚村の東端まで伸び、直江村の南岸堤と霞堤を形成しています。

六．牧田川の改修工事

『養老町史資料編下巻』によると、明治十年代の牧田川の川幅は、南派川が約三三〇ｍ、北派川が約五十ｍ程でした。

将棋頭では、明治五（一八七二）年に十三戸・四十二人、明治十四（一八八一）年に八戸・二十七人（町村略誌）で、明治二十九（一八九六）年の大洪水で全戸が流出し、付近の村々に移住しました。

しかし、その後南派川の川床が次第に高くなり、明治三十（一八九七）年頃には南北両派川とも川床が同高となりました。この将棋頭の維持修繕ならびに左右両岸の堤防に関する諸工事等は両派川の関係地元論争の的となり、極めて重要な意味を持っていたのです。

牧田川下流工事は、牧田川と杭瀬川との分流と合流点の付け替え工事を主目的として、掘削と浚渫は、昭和八（一九三三）年四月に開始し、戦争で一時中断しましたが、昭和二十五（一九五〇）年三月に竣工しました。牧田川と杭瀬川は背割堤で分けられ、合流点は三・四ｋｍ下流に付け替えられ、昭和二十四（一九四九）年二月に新杭瀬川が通水されました。

一方、支派川改修工事は、昭和六（一九三一）年三月に着手されました。この工事の改修区域は、養老町大字沢田地先広瀬橋より下流から同町烏江地先直轄改修上流端に至る約八・三ｋｍ間で、計画高水流量八三四・四㎥/ｓ、勾配 1/1,800～1/1,000と定められました。同町五日市付近で二派に分れていた南派川を締切って一川にし、掘削を施して新規の築造あるいは在来堤を拡築し、護岸・水制を施して水流の矯正を図ると同時に堤防を強化しました。また横堤・床固を新設して河床の安定を図り、なお付随工事として用水統一・悪水路付替・橋梁等を施行しました。

工事は昭和十八（一九四三）年度に全て完成しました。

■参考資料
『大久保長安に迫る』
平成二十五年　村上・馬場ら揺籃社
『養老町史資料編 下巻』
昭和四十九年　養老町
『郷土の治水 ―養老町―』
平成三年　養老町教育委員会
『木曽川上流改修工事誌』
昭和四十年　木曽川上流工事事務所
『養老郡志　復刻版』
昭和四十五年　岐阜県郷土資料刊行会

「第7回 全国禹王サミットin海津市」が令和元年十月十九日～二十日に開催されます。

禹王は、中国で古くから治水の神として崇拝された人物で、全国の禹王が祭祀されている地域においてサミットが執り行われています。

この機会に、木曽三川下流域の輪中における治水信仰について、連載し紹介します。

〔中国から来た治水神・禹王③〕

海津市歴史民俗資料館　水谷　容子

今回で七回目となる「全国禹王サミット」ですが、第一回の開催地は平成二十二（二〇一〇）年、酒匂川流域の神奈川県開成町でした。富士山東麓を水源とし足柄平野を貫いて相模湾へ注ぐ酒匂川は、かつては複数の川筋が入り交じる急流で、氾濫による流路変更を繰り返していました。

戦国末期の小田原城主 大久保氏は、酒匂川周辺を整備して大規模な新田開発を行い著しい成果を上げましたが、宝永四（一七〇七）年の富士山の噴火によって再び土地が荒廃し、治水政策をめぐる村々の対立が続きました。

その後、八代将軍 徳川吉宗に登用された田中丘隅（休隅とも。一六六二～一七三〇）が治水工事を行い、酒匂川の河道を復活させ地域再生を成し遂げました。そして復興のシンボルとして川の両岸に治水神・禹王を祀り、祭礼を行うことで治水意識を高め、地域の結束につなげようとしたのです。

このように、日本各地の禹王遺跡や禹王まつりが伝わる地域には、長く水害に悩まされ乗り越えてきた歴史や文化があります。東海地区において初めての開催となる本サミットでは、木曽三川流域における水害の歴史と禹王崇拝についての講演のほか、「輪中と伊勢湾台風六〇年」をテーマとしたパネルディスカッションを予定しています。

"治水の歴史と現在・これから"について、皆さんと一緒に考え、近年頻発する集中豪雨や大規模災害への備えの一助となればと思います。

第7回 全国禹王サミットin海津

【場　所】海津市文化センター
及び海津市歴史民俗資料館
（岐阜県海津市海津町高須、同町萱野）

【日　程】
●十月十九日（土）
・午後十二時四十五分
開場（海津市文化センター大ホール）
・午後一時二十分～五時二十分
＊アトラクション（二胡演奏）
＊講演Ⅰ
「木曽三川の水害と治水の歴史（仮題）」
岐阜聖徳学園大学教育学部教授　秋山晶則 氏
＊講演Ⅱ
「濃尾平野の禹王遺跡と治水信仰」
治水神・禹王研究会長　植村善博 氏
＊パネルディスカッション
《輪中と伊勢湾台風六〇年》
（冒頭）伊勢湾台風に関するビデオ上映
コーディネーター　植村善博 氏
パネリスト
木曽川下流河川事務所長　村田啓之 氏
ＮＰＯ木曽川研究会代表　久保田稔 氏
大垣輪中研究会長　伊藤憲司 氏
海津市民代表　伊藤常行 氏
●十月二十日（日）
・午前八時～
現地見学会
（大垣城周辺、大榑川改修紀念碑）
※事前申込制／大垣駅前発／参加費五百円
・午前十時四十分～
海津市歴史民俗資料館企画展
「木曽三川と禹王信仰（仮題）」見学
・午後十二時五十分～
自由見学会（金廻四間門樋、木曽三川タワー、船頭平河川公園、輪中堤切割ほか）
※事前申込制／海津市歴史民俗資料館発／参加費千五百円（昼食付）

【主　催】海津市、治水神・禹王研究会
【共　催】国土交通省 中部地方整備局
木曽川下流河川事務所
【後　援】大垣市、大垣市教育委員会
【申し込み・問い合わせ】
海津市歴史民俗資料館
（岐阜県海津市海津町萱野二〇五―一）
ＴＥＬ　〇五八四―五三―三三三一
ＦＡＸ　〇五八四―五三―三三三一
メール　shiryokan@city.kaizu.lg.jp

尾張平野南部における川の恵みとその変容

蟹江町歴史民俗資料館　主任学芸員　大野麻子

尾張平野南部は、木曽三川を始め日光川、新川、庄内川やその支流が流れる水郷地帯である。かつては多くの水路が網目のように流れ、水運、漁業、食文化等、人々の生活は川の恵みによって支えられてきた。

しかし、川の氾濫に悩まされてきた歴史もあり、昭和三十四（一九五九）年の伊勢湾台風襲来以降は水害対策等により生活から川が遠のいたのも事実である。その中で、川の恵みに支えられた文化は、消えたものもあるが、変容しながら今に残るものもある。

昭和 32 年頃の蟹江町舟入地区　＜出典：『写真に見る蟹江町百年の歩み』＞

川の恵みに育まれた生活文化

私の勤務先のある蟹江町は、尾張平野南部の木曽川下流のデルタ地帯に属し、木曽川、長良川、揖斐川の木曽三川と庄内川に挟まれたところにあり、面積十一㎢という狭い町域にもかかわらず、日光川、蟹江川、福田川、善太川など幾筋もの川が流れている。かつてはそれらの川の間にも編み目のように水路が走り、人々は、川の中で生活を営んできた。

江戸時代末期の『尾張名所図会』には、蟹江の中心地であった蟹江川沿いの風景の絵図が掲載されているが、川には人や荷物を積んで行き来する船がいくつもあり、船着場では荷降ろしをする人の姿もみられ、多くの人が橋を行き互い、活気のある様子が描かれている。舟運の良さによって川沿いのまちは発展していったのである。一方、この地域の沿岸部には江戸時代以降新田開発によって形成された広大な田園地帯が広がっているが、昭和三十年代までは田へ出かけるためには水路を船で移動することが当たり前の光景であった。住宅がない田園地帯にはあまり道が整備されておらず、水路が道の役割をしていたのである。

『尾張名所図会』蟹江川

海抜ゼロメートル地帯にあるこの地域では、水面と地面の高さに差がなく、川に河原が存在しないばかりか水面と家屋が隣接していたところもあり、家から直接船で水路に出て出かける光景も珍しくなかった。平野でほとんど土地に高低差がないので、水の流れは非常に緩やかであり、竿を操作して水路を行き来するのはたやすいことであった。

当然、川の利用は交通だけにとどまらない。この地域一帯は、農業を生業としてきた人たちが多いが、古くから半農半漁、あるいは漁業を生業とする人も多かった。明治三十一（一八九八）年発行の『愛知県海東郡志』には「日光・蟹江・新川・善太川等の諸川より、多く鯉・鮒・鰻・鯰・鮒・白魚・蜆・蛤等を産するを以て、沿岸の村落には、漁業に従事するもの少なからず」（魚子はボラをさすと思われる）と紹介されている。蟹江町でも蟹江川の河口の舟入地区に

舟で農作業へ

『愛知県海東郡志』の一節

はかつて漁港があり、明治時代には二〇〇戸を超える漁業者があった。伊勢湾へ船を出し、漁をする者もあったが、同時に川で漁をして生業とする者も少なくなかった。そして漁業を営む者でなくても、身近な川や水田で魚介類をとり食材にすることは日常的なことだった。また、川は子どもたちの格好の遊び場でもあり、遊びながら魚や貝をとることも多く、それらが食材となっていた。

このような環境のなかで、この地域ではよく川魚が食卓にのぼったものだった。また、家の隣を流れている水路に網を入れてガザガザやれば、何かしらの小魚が捕れ、それを煮ておかずにしたという。また、蟹江川沿いの家庭では、「今日はおかずにできる食材があまりないな」という時には、ちょっと川まで行ってシジミを採ってきて、味噌汁などにしたそうである。そのほか、川で捕れた魚がどのようにして食卓にのぼったか、いくつか紹介する。

川で捕まえたフナは、甘露煮などにすることもあったが、赤味噌（豆味噌）で煮込んで、「ふな味噌」にするのが定番であった。寒ブナが美味しいといい、冬から春にかけての料理であった。ウロコやハラワタをとり、鍋に大豆を敷きつめた上にフナをのせ、五時間程度水煮する。そして味噌やザラメを入れて味付けをし、さらに五時間程度煮込んで仕上げるのである。弱火でじっくり煮るのが良く、コンロの火ではなく、練炭火鉢や石油ストーブの上にのせっぱなしにしておくものだった。長時間かけて煮るので、骨もホロホロになり、身とともに美味しく食べられる。鍋底に敷いた豆は煮詰める時に鮒の身が鍋にこげついてしまわないように入れるというが、この豆がフナの出汁と味噌の味をよく含んで美味しいという人も多い。ふな味噌を作る地域は広範囲にあり、尾張平野南部のほか、三重県桑名市や岐阜県海津市、羽島市など木曽川下流域一帯に分布している。

ふな味噌

モロコやハエ（フナの幼魚）は、春から秋にかけてよく食された。モロコは成長すると十㎝程度にもなるが、この地方では三～四㎝ほどの小さなものを食用にする。これらの魚は、四つ手網を川の岸から仕掛け、夜に提灯などの明かりで魚をおびき寄せて捕獲したり、水田に引いた水を落とす時、ノドキ（ウゲ）を水の落とし口に仕掛けて捕獲したりした。

モロコやハエは醤油とザラメで煮て佃煮にした。これらは押し寿司の上にのせる具にもなり、「もろこ寿司」や「はえ寿司」は祭りや法事の時のごちそうになった。

ボラは海と川とを回遊する魚であるが、川に入ってきたものを捕まえた。網などにもかかったが、水面を波立たせると驚いて飛び跳ねる習性があり、小舟をバチャバチャと揺らすと舟の中に飛び込んでくるので、簡単に捕獲できたという。ボラは出世魚で、稚魚や幼魚はハヤ、コボ、オボコ、スバシリ、イナ、ニサイなどと呼ばれ、大きくなるにつれて呼び名が変わる。食卓に上るのは、二十㎝ぐらいの大きさのイナまたはニサイ、三十㎝以上の大きさのボラである。イナやニサイは姿のまま塩焼きや甘露煮にし、大きなボラは「ボラ雑炊」にした。雑炊、とは言っても、汁気の無い炊き込みご飯である。川でとれたボラは臭みがあったので、ネギやショウガと一緒に炊き込んだ。大釜で炊くので、寄合など大勢集まった時のごちそうとしてよく作られた。また、蟹江町の名物料理で「いな饅頭」というものがある。特殊な道具を使いエラから背骨とはらわたをとり、調理味噌を腹に詰めて焼いたもので、一見普通の焼き魚に見えるが、腹を割いていないのに味噌が詰まっている、という趣向を凝らした料理である。特殊な技術が必要であり、料亭で考案されたとされている。客をもてなす時や、また、出世魚なのでお祝いの時の料理として珍重されてきた。

ノドキ（ウゲ）

このほか、ナマズは大きければ開いて蒲焼きに、小さい物は姿煮にした。コイは刺身やコイ汁にして食べられた。蟹江ではあまり聞かれないが、ボラ雑炊のように炊き込んでコイ雑炊にした地域もあった。ウナギは、良質のものが豊富にとれたが、いい値段で売れたので、家で調理するよりもお金に換えることが多かった。子どもも遊び半分で捕まえたウナギで小遣いを稼いだという。家で食べる場合、さばくことができれば開いて焼いたが、できなければぶつ切りにして煮るなどした。

もろこ寿司

災害と港湾開発、そして伊勢湾台風

こうした川の恵みに育まれた生活文化も、昭和三十年代に激変することになった。

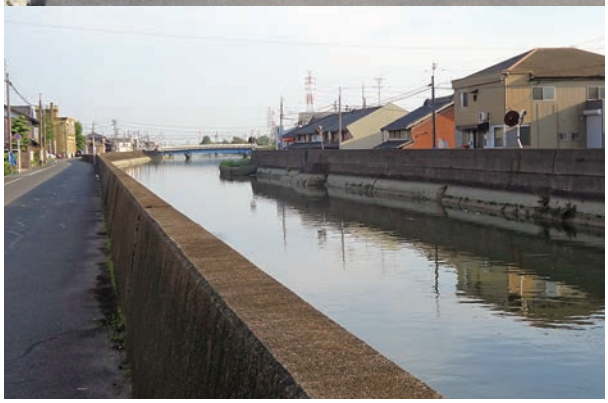
尾張平野南部は大半が海抜ゼロメートル

地帯であり、度々河川の氾濫がおこり、水害に悩まされてきたのも事実である。その中で、人々、特に漁業を生業とする者たちが災害への対策と、川からうける恵みと、どちらをとるかの選択を迫られる場面もいくつかあった。大正元（一九一二）年には台風による高潮でこの地域は大きな被害をうけた。これをうけて蟹江川と日光川との合流する場所のすぐ下流に樋門を設置する計画が立てられた。この時、蟹江港を拠点とする舟入の漁師たちが漁業への影響が大きすぎると猛反対したため、高潮の時にだけ閉鎖する樋門が日光川に、そして蟹江川には蟹江港の少し上流に閘門が設置されることになった。しかし、その後も地震や水害があり、昭和三十（一九五五）年には日光川河口に水門を設置することが決められ、漁業補償のもと、建設が始まった。一方、この頃名古屋港湾開発計画も立ち上がり、こちらも漁業補償の話が持ちかけられていたが、伊勢湾の広大な漁場が失われることになるため漁師たちは抵抗していた。

伊勢湾台風で被災した新千秋地区（現・蟹江町蟹江新田）

そんな中、昭和三十四（一九五九）年九月二十六日、伊勢湾台風がこの地を襲った。最大瞬間風速四五・七mという名古屋気象台始まって以来の強風を記録したうえ、満潮と重なって三・八九mの高潮が押し寄せたのである。海部地方事務局の『海部地方伊勢湾台風誌』には次のように記されている。「海岸線を長く持ち、木曽川をはじめ、鍋田川、筏川、宝川、善太川、日光川及び福田川等多くの川を抱いている海部郡としては高潮の襲来による海岸堤の決潰と増水による河川の氾濫とによって人畜の死傷、家屋の流失倒壊、道路、耕地、船舶等の損壊、農作物の被害は実に膨大な数量に達した。」海抜ゼロメートル地帯であるこの地域は堤防の決壊により一面海と化し、台風が過ぎ去った後も一ヶ月以上水に浸かった状態であった。そのような状況の中、水路を行き来するために持っていた舟が救助や被災生活に役だったという。

伊勢湾台風の被害の教訓をうけ、名古屋港には高潮防波堤が建設されることになり、抵抗を続けていた漁師たちも漁業権放棄に合意し、昭和三十九（一九六四）年、漁協は解散するに至り漁港はなくなった。日光川河口水門の建設にも拍車がかかり、昭和三十七（一九六二）年に完成、これによって日光川水系は汽水から淡水となり、汽水域に生息するシジミなどは姿を消した。さらにこれ以降、災害の対策のため、排水機や川の堤防の整備が強化された。蟹江川では堤防に壁が築かれ、川は人々の生活から隔たれた存在になってしまった。漁業を営む者がなくなっただけでなく、船での移動や川で食材を調達して料理することもなくなっていった。高度経済成長期も重なり、サラリーマン家庭が増え、車社会となり、食材は何でも買うようになっていく時代でもあったが、伊勢湾台風の被害により家や船を奪われたり川の様子が変化したりしたことが、人々の生活の変化を加速させたのは言うまでもない。


昭和36～7年（上）と現在（下）の蟹江川

変容しつつ、伝えられる川の恵み

伊勢湾台風の襲来から六十年の年月が過ぎようとしている現在、蟹江町では川で食材を調達して調理しているという人はほとんどいなくなってしまった。しかし、郷土料理として今に伝わる川魚料理は残っている。前述で紹介した、ふな味噌やもろこの佃煮は町内の業者で加工され、地元のスーパーマーケットなどの惣菜コーナーに並ぶ。町の交流センターでは定期的にもろこ寿司が販売され、イベントではボラ雑炊も郷土料理として紹介・販売されている。生活から川が遠のいた現在、こうした郷土料理がかつての川と人との関わりを伝えるものになっているのである。

しかし、これらの料理が家庭で作り継承されることがなくなり、惣菜として売られることが多くなった今、日常のおかずであったふな味噌も行事の時の特別なごちそうであったもろこ寿司も、同じ川魚料理の一つとしてしかとらえられなくなっている。さらに近年、ふな味噌やもろこの佃煮は、観光客向けのお土産としても販売されるようになった。川の恵みを活かした郷土料理は、地域の人たちが昔からある郷土の味を懐かしむための存在だけでなく、地域の文化を広く知らしめるための存在にもなりつつあるのである。

■参考資料
『蟹江町史（蟹江町史編さん委員会）昭和四十八年　蟹江町
『蟹江町歴史民俗資料館年報 第二十三冊』平成十五年　蟹江町歴史民俗資料館
『蟹江町歴史民俗資料館年報 第二十四冊』平成十六年　蟹江町歴史民俗資料館
『土木学会論文集D2（土木史）Vol. 69, No. 1』「低平地河川日光川の河口締切に至る経過と背景」平成二十五年　土木学会　安井雅彦

水にまつわる民話

鬼ケ坂（関市武儀）

祖父川の奥には、八つの滝があり、年中豊かに水があふれていましたが、ある年、日照りが続いて、滝は石がごろごろころがるばかりになりました。村は深刻な水不足になり、八滝の神さまにお供えをして水乞いをしましたが、いっこうに雨の降る気配がありません。

そんな時に、隣村に通じる峠の向こうのはすぶちには、水がこんこんと湧いていると、村人のひとりが知らせてきました。これを聞いた村人たちは、こおどりして喜び、さっそく水を汲みにいこうという話になりました。

「しかし、鬼が棲んでるというあの峠をこえられるだろうか」

「峠ではおそろしい鬼の声が毎夜聞こえるそうじゃないか」

なんとしても水は欲しいが、鬼は怖い、村人たちは思案に暮れました。

それから間もない夜、金棒を持った鬼を先頭に、赤鬼青鬼らが列をなして峠道を登って行きました。鬼は面をかぶった村人の水取りの一行で、天秤棒で桶をかついだ鬼や子どもの鬼も混じっていました。水をかついで峠を越えるのは大層難儀をしましたが、村人たちは無事に村まで水を運びました。

それからは、日照りが続くと祖父川の人々は、鬼の面をかぶって峠を越え、はすぶちの祠の前で雨乞いのおどりを踊り、水を汲んで運ぶようになりました。また、水無神社の祭りには、鬼の面をかぶった「棒振り」が行列を警護して、はすぶちの祠まで笛や太鼓を奏でて練り歩きました。

出典
『武儀のむかし話』

ＫＩＳＳＯは、創刊号からの全てが木曽川下流河川事務所のホームページよりダウンロードできます。

表紙写真
『川浦渓谷』＜提供：関市観光協会＞
長良川の支流：板取川上流部（川浦谷）にあり、高さ40～50mの花崗岩の断崖が約7kmにおよぶ神秘的な秘境です。
春の岩ツツジ、秋の紅葉とエメラルドグリーンの水面とのコントラストは、訪れる人の目を楽しませてくれます。

伊勢湾台風60年　関連事業のご案内

木曽三川下流域の資料館等では、伊勢湾台風60年を迎え、様々な企画・展示を開催します。この機会に、伊勢湾台風を振り返ってみてはいかがでしょうか。
（詳細は、各資料館等にお問合せください。）

弥富町歴史民俗資料館
企画展　「いま、伝えたい記憶」
期　間　8月1日(木)～9月29日(日)
- ◆所 在 地　愛知県弥富市前ケ須町野方731
- ◆開館時間　9：00～16：00
- ◆休 館 日　毎週月・火曜日、祝日の翌日、年末年始
- ◆お問合せ　0567-65-4355

蟹江町歴史民俗資料館
企画展　「伊勢湾台風写真展」
期　間　9月10日(火)～9月29日(日)
- ◆所 在 地　愛知県海部郡蟹江町城一丁目214番地
- ◆開館時間　9：00～17：00
- ◆休 館 日　毎週月曜日、祝日の翌日、年末年始
- ◆お問合せ　0567-95-3812

愛西市佐織歴史民俗資料室
企画展　「伊勢湾台風、あれから60年」
期　間　9月21日(土)～11月3日(日)
- ◆所 在 地　愛知県愛西市諏訪町郷西456番1
- ◆開館時間　9：00～17：00
- ◆休 館 日　毎週月曜日、祝日の翌日、年末年始
- ◆お問合せ　0567-26-1123

大治町公民館
企画展　「伝えよう伊勢湾台風」
期　間　10月上旬～11月上旬
- ◆所 在 地　愛知県海部郡大治町馬島大門西10番地
- ◆開館時間　9：00～21：00
  （日曜日、祝日は17：00閉館）
- ◆休 館 日　毎週月曜日、祝日の翌日、年末年始
- ◆お問合せ　052-443-2671

輪中の郷
アニメーション映画＆防災学習展示
「伊勢湾台風60年　－学ぶ･備える･助け合う－」
期　間　8月10日(土)～9月29日(日)
- ◆所 在 地　三重県桑名市長島町西川1093番地
- ◆開館時間　9：30～16：45
- ◆休 館 日　毎週月曜日、祝日の翌日、年末年始
- ◆お問合せ　0594-42-0001

木曽川文庫
伊勢湾台風関連図書・資料
「伊勢湾台風特別コーナー」
期　間　9月1日(日)～11月上旬
- ◆所 在 地　愛知県愛西市立田町福原
- ◆開館時間　8：30～16：30
- ◆休 館 日　年末年始
- ◆お問合せ　0567-24-6233

『KISSO』 Vol.111 令和元年8月発行

編　集　木曽三川歴史文化資料編集検討会（桑名市、木曽岬町、海津市、愛西市、弥富市ほか）

発　行　国土交通省中部地方整備局木曽川下流河川事務所
〒511-0002　三重県桑名市大字福島465
TEL（0594）24-5711　ホームページ URL http://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/